

化学の研究水準

代表取締役社長 土 屋 隆

湯川秀樹博士が「中間子論」で日本人初のノーベル賞（物理学賞）を受賞した頃、私は小学生で、「理科」の世界であったが、訳も分からずに「物理学」が急に身近に感じられたものである。それから50年余りが経過し、昨年の白川英樹筑波大名誉教授に引き続いて、野依良治名古屋大学教授が、ノーベル化学賞を受賞されることになった。

日本の化学・化学技術の凋落が言われ、「遅れてきた男たち」と揶揄される中で、この半世紀の間、黙々として化学の世界で世界レベルの研究をされていたことに感銘を受けた。

受賞決定後の記者会見で、野依教授は、「日本の化学分野の学術研究水準は、世界に引けをとらない。他の分野にも能力のある人はいる。もっと産業界の研究者と交流し、自らの成果を広く普及させる努力が必要だ」更に、「学問の水準と産業競争力は直接結びつかない。日本はモノづくりで生きていくべきだ。大学の成果をうまく産業界に移転する仕組みが機能していない」と述べておられる。化学産業に携わるものとして、この言葉を重く受け止める必要がある。

翻って、当社の現状を考察してみよう。

例えば、スペシャリティー製品と呼んでいる、ジルコニア、スパッタリングターゲット、電解二酸化マンガン、石英硝子のように、販売シェアは世界のトップレベルにあって、「モノづくり」で生きようとしているが、技術の水準は如何であろうか？ 世界から注目されているであろうか？ 残念ながら「否」と言わざるを得ない。

スペシャリティー事業において、「モノづくり」で生きようとすれば、学問に裏打ちされた技術水準がトップでなければ、「明日はない」と考えなければならない。

勿論、当社の研究開発の柱は新しい事業を創出することであるが、限定された部分において「社内外で評価されうる技術や知見を獲得することを目的とする研究（＝これを「先端研究」と呼ぶことにしている）」を更に強化すべきであると考えます。

志を高く持ち、「先端研究」においても、世界に立ち向かえる研究成果を実証しよう。